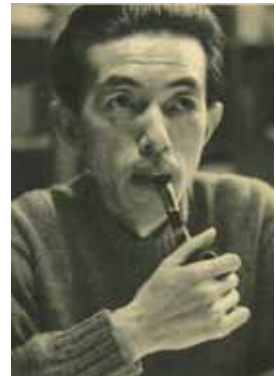


福田恆存 (ふくだ・つねあり) 1912～1994

評論家・劇作家・演出家・翻訳家 ～ <戦後>に異議あり 保守の論客～

出生 1912年(大正元)8月25日、東京市本郷区駒込東片町(主に現・文京区向丘)に生まれる。「恆存」は作家・石橋思案が「孟子」から採って名づけた。父は東京電燈(現・東京電力)の会社員。幼時、家族は東京市内で転居を重ねたあと神田錦町に落ち着き、戦争末期までその家に暮らす。

履歴 1936年、東京帝大文学部英吉利文学科を卒業後、中学教師、出版社勤務、団体職員等、様々な職を経るかたわら文芸評論を発表。戦後、その評論活動の対象は文芸のみならず政治・社会・文明にまで及んだ。一方で、戯曲の創作と舞台の演出にも取り組み、1952年から56年まで劇団文学座に属した。1953年、ロックフェラー財団の奨学金により渡米、米欧に1年間滞在。1963年には劇団雲を旗挙げ、その上部団体・現代演劇協会の理事長に就任する。1969年から83年まで京都産業大学教授を務める。1981年、日本芸術院会員となる。



事績 文芸評論家としても戦後を代表する一人であるが、政治・社会・防衛・教育等、多岐にわたる評論で、自由主義と保守主義の立場から論敵を辛辣に批判した。特に戦後の国語改革(当用漢字と現代かなづかいの採用)に対しては、終生その不当性を訴え続けた。その思想は総じて戦後日本の制度と風潮に対する異議申し立てだったといえる。演劇人としては劇作・演出のみならず、雲・櫻・昴などの劇団運営にも携わり、新劇史に大きな足跡を残した。さらにシェイクスピア、O・ワイルド、D・H・ロレンス、ヘミングウェイなど英米文学の翻訳も多数手がけ、翻訳作品の全集も出版されている。

評価 思想への評価は論者の立場で極端に異なるが、論理の明晰性と立場の一貫性は広く認められている。演劇人としての活躍、『シェイクスピア全集』(新潮社)個人訳などの翻訳の業績は、ともに定評がある。国語表記は、福田の孤軍奮闘むなしく戦後の変更が定着した感があるが、小林秀雄、石川淳、三島由紀夫、丸谷才一らは歴史的かなづかいを堅持し、福田に無言の支持を与えたともいえる。

代表作

「一匹と九十九匹と」 失われた一匹の羊の尊さを説く新約聖書ルカ伝のイエスの言葉から、政治に対して文学を、また社会に対して個人を「一匹」と捉え、その重さを切々と訴える。戦後すぐに書かれた福田恆存の原点ともいべき評論。全集第1巻に収録。

「平和論にたいする疑問」 当初「平和論の進め方についての疑問」の題で『中央公論』1954年12月号に発表される。米軍基地や原水爆に反対する当時の進歩的文化人の平和論を批判する内容で、たちまち論争を巻き起こし、福田はこれ以後「保守反動」思想家とされた。全集第3巻に収録。

『私の国語教室』 戦後の国語改革、なかでも現代かなづかいに抗議して、歴史的かなづかいの正統性を立証しようとした労作。歴史的かなづかいの習得法から国語音韻の変化まで、実用・学術両面から平易に解説し、反響を呼んだ。第12回読売文学賞受賞。全集第4巻に収録。

エピソード 1938年に英語教師として赴任した旧制静岡県立掛川中学で、野球部選手の白紙答案に零点をつけ、甲子園出場に熱心だった校長と対立、翌年免職とされた。硬骨漢ぶりを示す逸話である。

神奈川 戦災で東京の家を失ったあと、戦後は大磯町に住み、1954年に購入した大磯513番地の家がついの棲み家となった。近所には作家大岡昇平が住み、交遊は大岡の東京転居(1969年)まで続いた。1965年2月11日には、当時の内山知事に招かれて神奈川県庁で講演を行い、持論である戦後の祝祭日批判と紀元節復活を訴えた。2月11日が「建国記念の日」となったのは、その2年後だった。

最期 1994年(平成6)11月20日、肺炎のため東海大学大磯病院で死去。享年82歳。

Great Works 34

福田恆存全集 全8巻 文藝春秋 1987～1988 <918.6 / 560>

解題 著者が生前、自ら編纂に当たったもので、各巻は著作の発表年代で区分され、さらに主題によって章分けされている。基本的に論文単位の編集で、単行本そのままの収録は長編評論に限られているが、各著作の題名・内容は単行本刊行時のものが採られている。翻訳・対談等は収録されず、発表された文章で収録されなかったものも少なくない。1巻から6巻まで巻末に著者による「覚書」が付されている。なお、著作集としては、これ以前に『福田恆存著作集』全8巻(新潮社 1957～

58 918.6/125)、『福田恆存評論集』全7巻(新潮社 1966 918.6/333)があり、また本全集の
で『福田恆存翻訳全集』全8巻(文藝春秋 1992~93 908/103)も出版された。

内容

- 第1巻 = 昭和12年 22年[文芸評論、殊に近代日本作家論を多く収録] 近代日本文学の系譜[1945~47年]
横光利一[1937年 最も初期の作家論] 嘉村磯多[1938~1939年] 小説の運命[1947~48年] 一匹と九
十九匹と[1947年]他
- 第2巻 = 昭和22年 27年[『西欧作家論』(創元社 1949年)と文芸評論から成る] ロレンス [1952年 チ
ャタレイ裁判特別弁護人としての最終弁論] 近代の宿命[1947年] 芸術とはなにか[要書房 1951年 書
き下ろし]他
- 第3巻 = 昭和27年 31年[平和論・国語問題をめぐる論争文、米欧紀行文など] 平和論にたいする疑問[1954
年] 「国語改良論」に再考をうながす[1955年] 日本および日本人[1955年] エリオット会見記[1955
年] 人間・この劇的なもの[1956年 新潮社 演劇を通して人間を論じた長編評論]他
- 第4巻 = 昭和31年 34年[多方面にわたるエッセイと国語問題についてのその後の研究] 私の幸福論[1955
~56年 原題「幸福への手帖」で連載・出版。女性のための人生論] 自由と唯物思想[1956年] 日本新
劇史概説[1958年] 私の国語教室[新潮社 1960年]他
- 第5巻 = 昭和34年 40年[言葉と日本語をめぐる考察、60年安保前後の時事評論等] 批評家の手帖[1959
年 言葉についての箴言集] 進歩主義の自己欺瞞[1960年] 常識に還れ[1960年 安保問題をめぐる進
歩的文化人批判] 自由と平和 ラッセル批判[1962年] 言論の自由について[1961年 中央公論社嶋
中社長宅襲撃事件をめぐる評論]他
- 第6巻 = 昭和40年 49年[ベトナム戦争、大学紛争の時期の評論が中心] 紀元節について[1965年 神奈川
県庁での講演] 乃木将軍と旅順攻略戦[1970年 史論] アメリカを孤立させるな ヴィエトナム戦争
をめぐって[1965年] 教育の普及は浮薄の普及なり[1969年 大学紛争論] 日米両国民に訴える[高
木書房 1974年]他
- 第7巻 = 昭和49年 [56年] [歴史論、演劇論、防衛論等] 私の英国史[1975年] せりふと動き[1977~
79年 俳優や劇団への書簡による劇評と演劇論] 防衛論の進め方についての疑問[1979年 森嶋通夫の
無抵抗主義防衛論批判]他 年譜 著書目録
- 第8巻 = 創作 【小説】ホレイシヨ-日記[1949年] 【戯曲】キティ颱風[1950年] 龍を撫でた男[1952
年] 総統はまだ死せず[1970年]他 【放送劇】大化改新[1966年]他 全収録作品題名索引

参考文献 ~この人をもっと知るために~

<図書>

- ㊦ 絶対の探求 福田恆存の軌跡 / 中村保男著
麗澤大学出版会 2003年 220p <910.26MM / 2123> 資料番号 21635263
- ㊦ 福田恆存と戦後の時代 保守の精神とは何か(教文選書) / 土屋道雄著
日本教文社 1989年 276p <910.28Y / 1720> 資料番号 20154100

<図書(部分)>

- ㊦ 保守思想の神髄 福田恆存 / 西部邁著(思想史の相貌)
世界文化社 1991年 p212 - 250 <121.6Z / 113> 資料番号 20325221
- ㊦ 福田恆存・人と作品 / 西尾幹二著(昭和文学全集27)
小学館 1989年 p1033 - 1037 <918.6U / 555 / 27> 資料番号 20069134
- ㊦ 福田恆存 / 中村保男著(言論は日本を動かす 第2巻)
講談社 1986年 p205 - 236 <281T / 122 / 2> 資料番号 12357166
- ㊦ 福田恆存論 / 磯田光一著(戦後批評家論)
河出書房新社 1977年 p7 - 32 <910.26H / 345> 資料番号 11895554

<雑誌論文等>

- ㊦ 父 福田恆存について / 福田逸著
諸君!(文藝春秋)35(4)[2003.4] p190 - 199 <051 / 115>
- ㊦ いまこそ問う 福田恆存か丸山真男か / 坪内祐三著
諸君!(文藝春秋)28(11)[1996.11] p134 - 143 <051 / 115>
- ㊦ 『福田恆存全集』を読む / 桶谷秀昭著
中央公論(中央公論社)103(11)[1988.11] p304 - 311 <051 / 4>
- ㊦ 隣人・福田恆存 / 大岡昇平著
新潮(新潮社)58(9)[1961.9] p46 - 48 <051 / 13>